

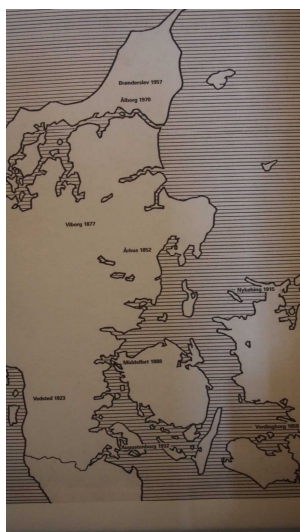
報告2 デンマーク

海峡の町の精神障害者たち

人口3万7千人のミゼルファートは海峡の町だ。2007年のデンマークの保守政権による自治体改革で近隣のエイヴィなどと合併する前は2万人の町だった。議会は25議席。最大会派の社会民主党は過半数に満たない11議席で、政策の近い中道左派で事前調整して市長を選出している。

*

精神病歴史博物館にいる。ミゼルファートには、1888年につくられた大きな精神病院（1200床）があった。現在は、歴史博物館の他、精神障害者の作業所やヘルパー養成学校、一般企業のオフィスなどが利用しているようだ。芝生の緑が鮮やかで、キノコも顔を出していた。



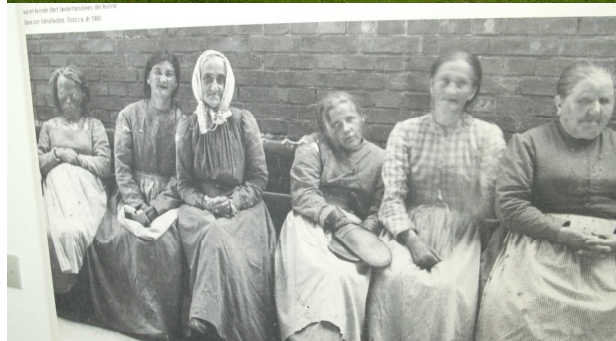
歴史地図をみるとデンマークの西半分のユトランド半島とフン島には10以上の大きな精神病院が確認される。その100年以上の歴史を博物館は、リアルに説明し展示していた。空気がとても重かった。

1976年から大規模国立精神病院の廃止がすすめられ、地域精神医療の発端となる。それから30年が過ぎた。

*

デンマークでは、精神障害のある人は約50万人、人口の15%はなんらかのうつ症状を抱えているという。（野村武夫『「生活大国」デンマークの福祉政策』ミネルヴァ書房）

精神障害のある人たちが暮らすグループホーム+



生活支援センターを訪ねた。町中の静かな住宅地にある3階建て12戸のアパートだ（下の写真）。1987年にスタートしたという。

生活支援センターのスタッフは5人（作業療法士、社会生活指導員・ペタゴーなど）自治体の職員だ。週4日は2人で、週末は1人で支援している。夜はだれもセンターにはいない。緊急の際には住人たちで連絡するという。

デンマークは家庭医制度が確立していて、だれもがまず自分の家庭医の診察を受ける。スタッフは医師や看護師とタイアップして仕事していると話していた。

*



スタッフと住人のみなさんは、コーヒーとお菓子でもてなしてくれて、わたしたちの質問に答えてくれた。

- ここは 36 ～ 70 歳が住むアパートです。18 歳から住める可能性があります。スタッフはときどき、必要なときに支援します。指導ではなく、家族や友だちの視線で。彼らの自分たちの価値観が大事。
- センターはみんなの「居間」、いっしょになにかをすることを大切にしています。
- 朝は朝食をいっしょに食べます。起きてこないと薬も飲まなくなるので。夕食もいっしょに、後片付けも共同で。メニューもみんな決めていきます。
- 週末はゆっくり、みんなで、楽しめるような、食事づくりをしています。
- それぞれのアパートは約 60 平米で、部屋に一人でいたり、センターに来て話をしたり、祭日はいっしょにお祝いしたり、このセンターを出発点にして、外に出ていく。
- 週に 1 度は、センターで 1 週間の生活とこころの整理をするようにしている。
- 月に 1 回、住民の意見を反映するための会議を開く。なにを話あうかはそれぞれが持ち寄る。「タバコは室外で吸う」を決めるのも、多数決ではなく、話し合いで合意する。
- 年間で生活していると住宅費は公的支援される。ここは安くて快適。友だちも、相談する人もいる。

＊

「どうしても相性が合わないときってどう乗り越えていますか？」の質問に、

「病気で具合の悪いときもある。みんな許容量が大きい。みんなわかっている」とスタッフが答えると、「あるよ！そういうときはスタッフに相談するよ」と住人の一人。

「一人で住んでいたらさみしさから抜けられない。ここなら、さみしさを抜け出せる。みんなとなにかをいっしょにできる実感がある。だから、生きられる」

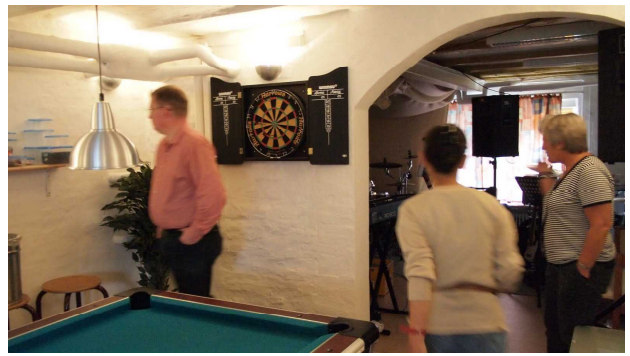
わたしたちが「哲学者」と名付た彼が語っていた。

＊

翌日、町の中心にある「白い家（ホワイトハウスと言っていた）」という日中の精神障害者の「居場所」を訪問した。センター長のエルサさんが解説してくれた。



現在 35 名が利用しているというこの「たま



り場」は、月曜から金曜までが朝 8 時～夜 9 時、日曜・休日は 9 時～午後 3 時と開いている。地域医療チームと連携をとりながら、社会に参加できるように、それぞれの主体性を尊重し、そしてみんなでなにかすることを、「できる」体験をととても大切にしているそうだ。

「昔の隔離の時代とは違う。みんな社会に出はじめている。事件が起こるとたしかにマイナスはあるが、精神病を知ってもらい、話していくことで、まわりの人は変わっていく」

この道 30 年のベテラン・センター長の言葉だ。

＊

いつのまにか昨日のグループホームの住人の「哲学者」が座っている。地下にあるダーツや玉突きのレクリエーションコーナー、音楽バンドの練習場、木工の作業場を案内してくれた。

◇◆◇

グループホームの住人、ハンス・エック・マーソンさんの話をしたい。

自分のアパートの部屋を案内してくれたときのことだ。

3 階にあるシックなトーンの素敵な部屋。棚の上に子どもたちの笑っている 3 つの写真があった。



「それは、ぼくが支援（里親）してるナミビアの子どもたちだよ。今は手紙だけのやりとりだけど、いつかどこかで会えたらとても嬉しい」

ハンスさんは、この町で、なかまたちとこころおだやかに暮らし、今の地球に生きていることを学び、考え、そして、南西アフリカの子どもたちの支援を実践している。

デンマークの小さな町で出会ったかぎりなく優しいなかまたちの瞳に乾杯！
（菌部英夫）